

## 現地研究会に参加して

沢田嘉昭\*

本年の現地研究会は「日高地方の畜産事情について」をテーマに、10月12、13日の両日行なわれた。日ごろ、肉畜、乳牛を中心に畜産を考えている私にとって、軽種馬を中心とした日高の畜産事情を見聞できたことは、他人事と考えがちな軽種馬産業を現実のものとしてとらえることができたこと、日高の畜産事情と対比することによって私の今迄持っていた畜産の展望に別の視点を作ることができたこと、で有意義であった。

\* \* \*

10月12日8時10分、テレビ塔前を2台のバスで出発し、北海道農業試験場からの参加者を加えて総勢113名、曇空でやや寒さを感じる中を日高に向けて出発した。私達の乗車した1号車は、まず最初に案内役の北農試の林満氏から胆振、日高の農業概況について、説明を受けた。恵庭・千歳から日高にかけての一带は樽前火山灰地帯に属していて、火山灰層は、恵庭で50～60cm、千歳では90cmに達している。この樽前火山灰は静内までの日高西部一帯を覆っていて、日高地方の土壌は、静内以西の樽前火山灰地帯と静内からえりもにかけての洪積土壌地帯とに二分される。

車はまず、かん木林の中に短冊型に草地が存在する千歳町営牧野にさしかかった。千歳町営牧野は、総面積280ha、草地面積200haで、造成前の植生は以前の乱伐のために柏を中心としたかん木林になっていた。造成工法は、表層5cmの腐植を保持するために初めてクレアリングブレードディスクング工法で行なわれた所である。また造成費の関係で短冊型の開墾が行なわれたが、そのために残した林からビロの発生が見られたとのことである。乱伐による原植生の破壊が今日まで続いていること、またもう少し身近な問題としてのビロの発生は今後の未利用地開発において留意しなければならないことだろう。また現在草地の生産力は、鶏糞を散布している所では、10アール当たり8～10tonに達しているが、鶏糞は生のままダンプで散布されており、公害問題とからめて、今後糞尿等の草地への還元技術の開発が待たれている。

次に車は遠浅・早来の酪農地帯にさしかかり、三股部長からこの地帯の現状についての説明がなされた。この地帯は北海道酪農の先進地帯で、現在2代目の経営になっており、大型化が進んでいる。しかし、現在、経営形態は、以前の乳牛中心から軽種馬の生産に転換しつつあるとのことであった。経済性の点からは、酪農よりも軽種馬の方が有利ではあろうが、何か異常な感じがしたしだいである。

\* \* \*

最初の目的地の静内軽種馬センターでは、三浦場長の説明で、まず最初にネプチューヌス（収得賞金額1億3千万円）、グッドリー（同1億8千万円）等の種雄馬を見学した。その後セリ市場を見ながらの説明では、種付料は30万円から45万円、プラス手数料として5

\* 北海道立滝川畜産試験場

万円とのことで、この金額は、種付開始から4年目には最初に種付した子が出走するために、3年間に種付する頭数を200頭として、購入価格の200分の1を種付料にしているとのことである。

次の目的地新冠種畜牧場は、まず場門を入ると、トド松・エゾヤマサクラ並木の20間道路が続き、広大な規模の一端をのぞかせていた。昼食の後、場内を見学したが、ここは明治5年7万町歩の用地に野生馬を集めたことに始まり、南部種・洋種を野生馬に交配することにより野生馬の改良を行なった。その後、60余年の御料牧場時代を経て、戦後農林省種畜牧場として、馬からホルスタインに切り換えて現在に至っている。現在264頭の種牛を飼養しており、優良種雄牛の都道府県への貸付・種雌牛の貸付ならびに譲渡を行っており、また、昭和45年度から種雄牛の後代検定事業を開始している。

施設関係では、300tonサイロ2基を備えた150頭収容の牛舎が昭和46年秋に完成しており、牛舎中央に支柱がなく、パイプライン、微温湯給水施設が設置されており、注目を集めていた。

その後、日高支庁で、川端支庁長、三輪崎経済部長から日高管内の農業概要について説明をうけた。日高は従来海岸線に沿った国道と、国道と直角に交わる各河川流域で構成されるクシ齒型の開発が行なわれ、そのために開発が遅れていたが、現在、国道と国道に並行する道道の整備が進んでおり、ようやく発展期に入った。農業生産額は、その6割が軽種馬生産で、ここ10年で2倍になっており、現在は過剰生産の危険性がある。また軽種馬生産農家の7割は5頭以下の規模であり、今後の軽種馬産業はこれらの小規模農家の育成が重要である。今後の方向としては、軽種馬産業の肥育基盤を利用した肉牛生産への転換、また、交通網の発達にもなって、そ菜栽培およびリクリエーション基地としての開発、を指向しているとのことであった。

日高支庁をあとにして第1日目の宿泊地えりも岬に向った。えりも岬までの海岸線沿いの国道は、あいつくの荒天のため、バスも数度波に洗われ、宿泊地のえりも岬も強風であったが、全員懇親会での歓談の中で、第1日目の研究会を終了した。

\*                         \*                         \*

以上第1日目の概略および若干の感想を述べたが、全体を通じて馬産地としての日高の印象が強烈で、そのことのみ目を奪われてしまった。農耕馬、軍馬としての馬生産基盤が失われた今日、日高の畜産は今後肉畜生産基地への転換を迫られて来るであろうが、今後未利用地の開発をとまれば、肉畜生産基地として十分な潜在力を備えていると感じたしだいである。

研究会の出発に際し、事務局から第1日目の感想記を依頼され、戸惑ったしだいで、先輩諸氏が読まれることを考えれば汗顔の至りですが、若輩の私に免じてよろしくお許しを願うしだいです。

最後にこの現地研究会を企画し、実行された幹事の方々のご努力に参加者ともども厚くお礼申し上げます。